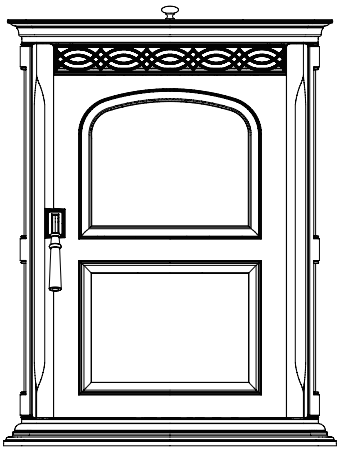
取扱説明書
ユーザーガイド

HARMAN®
BUILT TO A STANDARD, NOT A PRICE

ペレットストーブ
アセントラ



安全にお使いいただくために

ストーブの設置や使用する前に、必ず取扱説明書をお読みください。取扱説明書の指示に従わない場合、本品の損傷や思わぬ怪我や火災事故、最悪の場合死亡事故につながる恐れがありますのでご注意ください。

HEARTH&HOME technologies®
The Hearth Experts™

はじめに

ハーマン アセントラ ペレットストーブをお買い上げいただき、誠にありがとうございます。

ハーマンストーブは優雅さ、便利さ、高い機能性、信頼性を極めたペレットストーブです。

アセントラは、精密な温度制御ができる小型のルームセンサーを使用しています。安全装置を備え、特別に設計された燃焼ポットとイグナイターによる自動点火システムが装備されているので、灰分含有率が異なる様々な木質ペレット燃料を焚くことができます。アコーディオン型の鋳物製熱交換器システムにより、小さな火室の中に最大の表面積を設けることで、最も効果的な熱伝導が得られます。

社内の厳しい規準に合わせて製造されたアセントラは、ハーマンのペレットストーブの中でも、もっとも高度に進化したものです。ペレットストーブの技術で特許をとり、進化し続けてきました。ホッパーのふたがガラスなので、ペレット燃料の残量が一目で確認できます。鏡になったフロントガラスは、火の輝きで透明なガラスに変化します。

ペレット燃料に関する仕様

ペレット燃料の品質は、製造メーカーや、同メーカーのでも製造ロットで異なる場合があります。

燃料の材料

・おがくずなどの木の副産物でできたもの

・木の種類や使用している箇所よって、灰の量が変わってきます。

灰含有率が高い材料

・ミネラル含有量の多い硬木

・材料物質が木の皮や葉

灰含有率が低い材料

・軟木（松、樅など）

・ミネラル含有量の少ない材料

水分

・常に乾燥した燃料を焚いてください。水分を多く含む燃料を焚くと、燃料を乾燥させるためにエネルギーを使用してストーブは熱くなりません。湿気ったペレット燃料は、おがくずとなり、フィード・システムをスムーズに通過しません。

推奨サイズ

・ペレットの大きさは、直径が 6 ～ 8mm です。

・長さは 38mm 以下

・ペレットの長さは、同じメーカーであっても、ロット毎に異なる場合があります。

性能

・灰分の多いペレットは、より頻繁にメンテナンスをする必要があります。

・38mm より長いペレットを焚くと、ペレット補給や点火の一貫性が損なわれる恐れがあります。

- 目 次 -

ペレット燃料に関す仕様 …… 2
操作パネル …… 3
自動点火 …… 4
自動燃焼（室温モード） …… 6
手動点火（自動点火装置「OFF」） …… 7
手動燃焼 …… 8
室内センサーの取り付け …… 9
メンテナンス …… 10

操作パネル

送風量・設定切替

室温モード、本体出力、切のいずれかのモードを選べます。本体出力側に回すと室温に関係なく、一定量の燃料を送り続ける定常燃焼、室温側に回すと設定した室温で燃焼します。

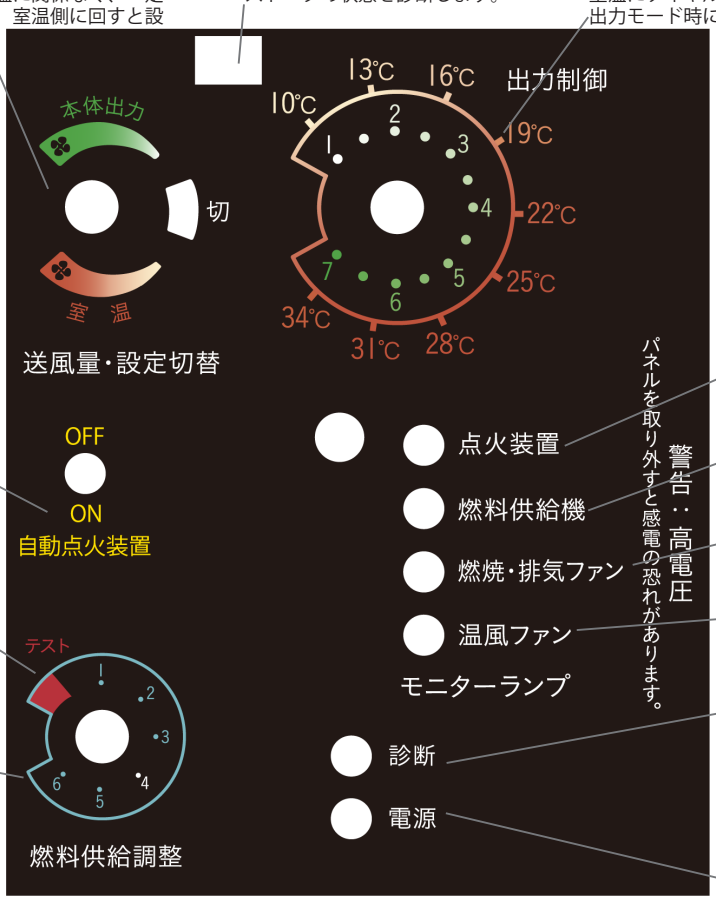
送風機の速度の調整範囲
中間のどこででもスピードが選べます。左側に回すほど " 強く " なります。

診断ポート

保守専用で専用の診断機を接続して、ストーブの状態を診断します。

出力制御

外側の数字は室温モード時に使用し、設定したい室温にダイヤルを合わせます。内側の数字は本体出力モード時に使用し、燃焼の強弱を調節します。



自動点火装置

点火を自動もしくは手動で行うかを選びます。

テスト

動作確認を行うため、すべてのモーターを最大で 1 分間作動させます。1 分後、オーガモーターは停止。燃焼と温風はファンモーターは「低」を維持します。

燃料供給調整

燃料供給のスピードを設定します。通常は "4" に設定します。

自動点火装置が作動時に点灯します。

燃料供給機が作動時に点灯します。

燃焼・排気ファンが作動時に点灯します。

温風ファンが作動時に点灯します。

送風量・設定切替のダイヤルが本体出力か室温にあるときに点灯します。
また、点滅しているときは、下記のエラーが起きていることを示しています。

電源が入っているときに点灯します。

図 1

点検ランプのエラーメッセージ

3 回点滅

ESP が規定範囲を何度も外れたことを示します。ストーブが正しく動いているようなら、手動リセット * を行ってください

4 回点滅

室温モードのときに発生します。点滅の意味は、室温センサーが機能していないか、もしくはストーブに接続されていない場合です。室温センサーを差し直してください。

5 回点滅

自動点火モードのときに作動します。36 分間にわたり点火しなかった場合に点滅します。リセットするには、送風量・設定切替のダイヤルをいったん切にして、それから再度設定します。

6 回点滅

25 分間以上、不完全燃焼が発生していることを示しています。6 点滅状態は、ストーブが燃料を切らしたまま運転したときにも発生します。リセットするには、送風量・設定切替のダイヤルを切にして、それから望みのモードへもどします。燃料不足ではないときに 6 点滅したときは、トラブルシューティングをご参照ください。

＊手動リセットの方法

電源コードを抜き、2～3 秒してから再度差し込みます。それでもエラー点滅が消えないときは、販売店に連絡してください。

自動点火

アセントラは、「本体出力」と「室温」の 2 つのモードを選択できます。本体出力モードは、出力制御を設定すると、ストーブは室温に関係なく、その出力制御の設定値で燃焼し続けます。

室温モードは、常に温度センサーが室温をモニターし、熱出力を調整して、室温が一定に保たれるようにします。室温モードは、設定温度以上になるとストーブを停止させ、室温が設定より下がると、再び自動でストーブが運転します。

室温モード

室温モードは、室内を希望の温度に保つために、最も簡単で効率の良い燃焼方式です。室温モードのときは、温度センサーが常に室温をモニターしています。外気の変化につれ、設定した室内温度を保つためには、求められる熱量も変化します。アセントラは、一定の温度が保たれるように、自動的に火の大きさや熱出力を調整します。外気温の上昇と共に室温が上昇すると、ストーブは徐々に運転を停止します。室温が下がってきたら、ストーブは自動点火して設定した室温に戻してくれます。

室温モードのときは、自動点火装置のスイッチを ON にするか、OFF にするか選びます。自動点火装置のスイッチが ON に設定されていると、自動点火装置が必要に応じて自動点火します。自動点火装置のスイッチが OFF になっていると、ストーブはジェル状あるいはワックス状の着火剤を使って手動で点火する必要があります。自動点火装置のスイッチが OFF のときは、ストーブは自動的に熱出力を調整しますが、熱が不要になっても運転は停止しません。最小運転の設定になり、そのまま維持します。自動点火装置のスイッチが OFF のときは、何らかの理由で自動点火装置が失敗したときでも、手動で点火することができます。

室温モードのときは、送風量・設定切替のダイヤルを回転させることで、温風ファン（ブロワー）速度を加減できます。ストーブ出力が上がると、ブロワーの速度が自動的に増して、より多くの熱が室内に送られるようになります。温風ファンは室温が設定温度に達すると停止するので、室温が上がりすぎることはありません。

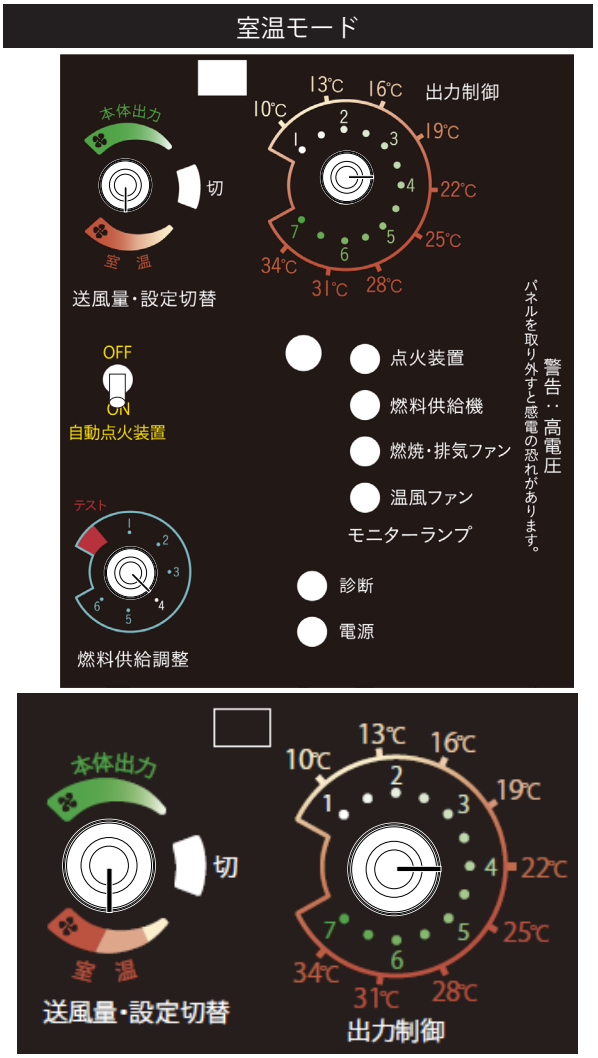


図 2

室温モード
このセッティングは、風量の速度は中で室温 22℃ に設定した状態です。

自動点火

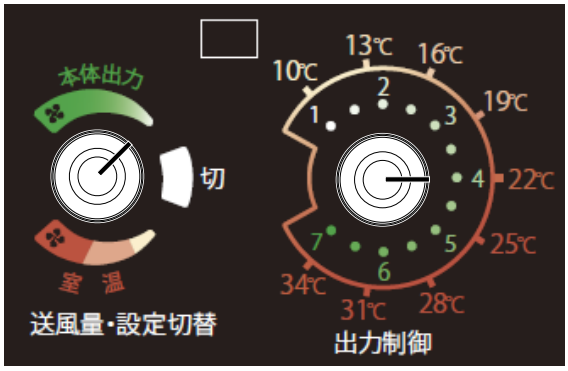
本体出力

本体出力モードで、自動点火装置のスイッチを ON の位置に設定すると、ストーブは自動で点火して出力制御ダイヤルで、望みの熱量に設定できます。熱出力と燃料消費量は、室温にかかわらず一定を保ちます。ダイヤル内側の目盛は 1 ～ 7 が範囲であります。これは相対的熱出力をあらわし、1 は最小、7 は最大です。

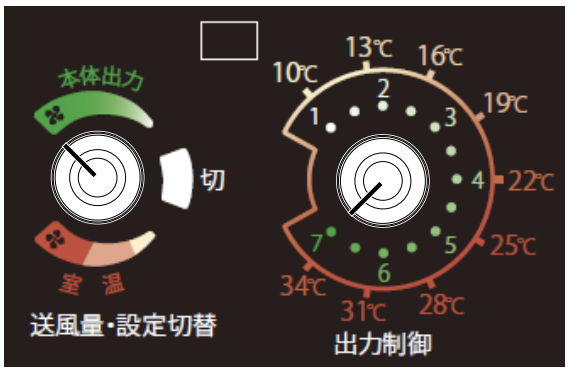
本体出力モードでは、燃料切れや手動消火されない限り、ストーブは自動停止しません。

ストーブを消火させるため、電源プラグを抜くことは絶対に行わないでください。燃焼送風機が止まり、ガラス周りやドアのガスケットから煙が漏れ出る恐れがあります。

本体出力モード



この設定は、「低」の送風で中火を生成します。 図 3



この設定は、「強」の送風で強火を生成します。 図 4

燃料供給調整ダイヤル

燃料供給調整は、モーターの許容稼働サイクルあたりの最大時間量をコントロールします。このコントロールは、コントロール設定と温度需要に基づき、燃料供給調整します。ダイヤル設定の最大許容量以下で、供給モーター作動時間を自ら決定します。通常のペレット燃料では、燃料供給調整は＃ 4 に設定します。灰分の多い燃料なら、設定は＃ 5 か＃ 6 がいいでしょう。ストーブを最大能力で稼働させたいときも、高い設定が必要です。ストーブを最大能力で燃しているときは、燃料供給調整を＃ 6、を出力制御は 7、ペレットは完全燃焼できるようになるまでは、燃焼ポットの前に落ちてきません。燃えているペレットの前には 2.5cm の灰を保っておきます。

図 5

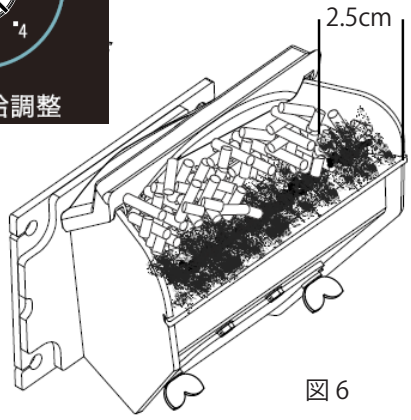


図 6

消火手順

送風量・設定切替を切にすると、火は徐々に弱まって消えますが、すぐには消えません。完全に消火するまで 1 時間以上かかる場合があります。

ストーブの燃料を切らせたまま運転を続けていると、点検ランプが 6 点滅します（参照：P3 の点火ランプのエラーメッセージ）。その場合は、送風量・設定切替を切にして回してから、再び ON に戻すと、制御盤がリセットされます。

自動燃焼（室温モード）

1. 砕けたペレットはおがくず状の細粒となり、簡単には落ちていかず､ホッパー内の下部にある角に溜まります。これらはホッパーの下部に押し流してから、ホッパーにペレットを入れます。システムが動き出すと、細粒も燃えてしまいます。もしくは、ホッパーにペレットを詰める前に掃除しても構いません。
2.「テスト」サイクルでは、燃料供給モーターが 1 分間稼働します。何度も「テスト」を行うと､燃料がバーン･ポットに入り過ぎてしまうので、点火のときに過剰な煙が発生する恐れがあります。
3. 燃焼排気ファンの速度調整は、窓や灰ドアが開いていると､オーガモーターや自動点火装置を稼働させません。
4. 燃料供給の速度を調整します。初めて焚くとき、あるいは別のペレット燃料を焚くときは、図 5 にあるように燃料供給調整ダイヤルを #4 に設定してください。#4 は標準的な設定で、さらに大きくする必要があるかもしれません。最適な燃料供給率になるように微調整していきます。ペレット供給率が高すぎると、燃料が無駄に消費されることになります。
5. 週に 1 度行うメンテナンスの手順です。燃焼ポットの底に新しい燃料が少し残ったままでも、付属のスクレイパーで掃除して問題ありません。まず、燃焼ポットの前部からこそぎとった灰を灰受皿に落とします。次いで、燃焼ポットの上部表面から下向けにこそぎ取り、燃焼ポットの底へ落とします。これは、ストーブが点火すると、供給装置によって押し出されて燃えつきます。
6. 灰受皿は、ペレット燃料約 1 トンから出た灰を溜めることができます。灰は年に 1 ～ 2 度捨てればよいことになります。（ペレットの品質により変動があります）

焚き始める（自動点火装置スイッチを自動点火の位置）。

電源プラグをコンセントにつなぎ、電源ランプが点灯していることを確認します。

不要な煙を避けるため、点火の前に灰受皿に燃料が入っていないことを確認してください。

1. 送風量・設定切替を切にする。
2. 燃焼ポットにペレット燃料を入れる。
3. 必要であれば、スクレイパーで汚れを取り落とし、燃焼ポットを掃除する。
4. ホッパーが空のときに点火させてしまったときは、燃料供給調整器を「テスト」に回す（60 秒サイクルで一回のみ）。これにより、ペレットはオーガチューブに送りこまれ、モーターの動きもチェックできます。

注：オーガモーターは、窓や灰ドアが開いていると動きません。

5. 燃料供給調整を # 4 に回す。
6. 自動点火装置を ON の位置に合わせます。
7. 出力制御ダイヤルを希望の室温に合わせます。
8. 送風量・設定切替ダイヤルを室温側に回します。
9. 運転中も必要に応じてホッパーにペレットを満たし、灰を除去します。

警　告

運転中は、フロントドアとホッパーのふたが閉まっていることを常に確認していてください。

注　意

点火するために化学薬品や液体着火剤は使わないでください。例えば、ペレットストーブの点火や火を強めたいとき、ガソリンや灯油などは絶対に使わないでください。また、引火性のある液体は、運転中のストーブからは離れたところに置いてください。

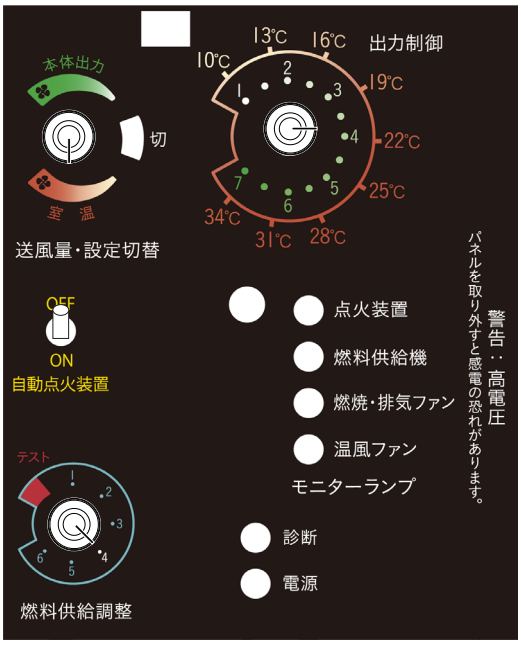
警　告

木質ペレット燃料だけを使い、ストーブでゴミは燃さないでください。

注：運転前に、梱包や出荷関連のものは取り除いておいてください。

手動点火（自動点火装置「OFF」）

室温モード



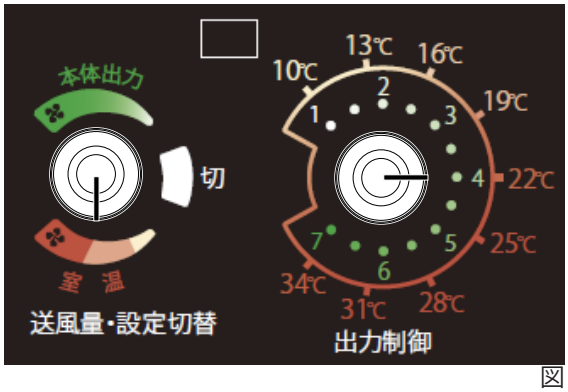


図 7

室温モード

このセッティングは、中間の速度で室温 22℃に設定した状態です。この設定では、 燃料供給調整を操作しなくても、大きな火を見ることができます

アセントラは手動運転が可能です。緊急時（自動点火装置の故障など）には、運転を手動点火で操作できます。

本機は、運転中にいつでも自動点火装置のスイッチで自動点火の ON と OFF を切り換えることができます。

注：自動点火装置を ON で本体出力、室温モードのいずれかで起動させ、点火装置ランプが点灯した後は、自動点火装置を OFF にしても、自動点火装置は点火を続けます。室温モードに設定されている場合は、設定温度に達した後も消化することはありません。自動点火の ON と OFF の切替は、点火ランプが点灯したら可能です。

自動点火装置のスイッチを OFF/ 送風量・設定切替ダイヤルを室温モード

着火剤（ジェル等）で火を付けられます。あるいは、自動点火で起動後、点火装置ランプが点灯したら自動点火装置を OFF にします。自動点火装置 ON と OFF の稼働時の違いは、火が設定温度を超えても消えない点です。ストーブは低燃焼になり、燃料がなくなるまで、あるいはより温度が必要になり、燃料供給率が高まるまでその状態が続きます。供給率調整およびダイヤル設定は同じ「自動」設定です。ESP 温度が低すぎると、温風ファンは完全に停止します。

自動点火装置のスイッチを OFF/ 風量・設定切替ダイヤルを本体出力モード

このモードの利点は、室温を上げることなく、大きな炎を見られることです。

ストーブが稼働中、出力制御が #3 以下に設定されているとき、温風ファンは稼働しません。これ以下の状態で出力制御ダイヤルを動かす必要はありません。この設定は、室内を暑くし過ぎずることなく、より大きな炎が見えることです。

例えば、いつ手動ストーブ温度に設定するかの一例としては、室内温度がすでに十分暖かいのに、炎を見たいというときです。本体出力にすることで、出力制御ダイヤル操作しなくても、炎を見て楽しむことができます。

注：本モード設定において、火を大きくしたいために温度設定を高くし続けると、ESP 温度が 176℃、あるいは出力が 81%になると、燃料供給送風機は自動的に ON になります。

手動燃焼

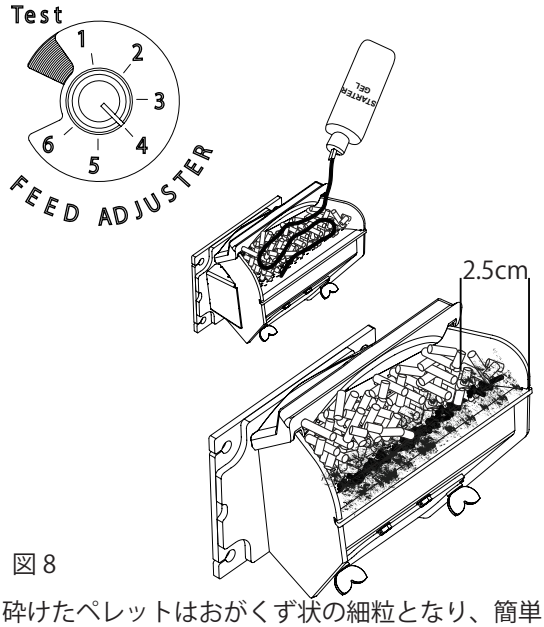


図 8

1. 砕けたペレットはおがくず状の細粒となり、簡単には落ちていかず、ホッパー内の下部にある角に溜まります。これらはホッパーの下部に押し流してから、ホッパーにペレットを入れます。システムが動き出すと、細粒も燃えてしまいます。もしくは、ホッパーにペレットを詰める前に掃除しても構いません。

2.「テスト」サイクルでは、燃料供給モーターが 1 分間稼働します。何度も「テスト」を行うと、燃料がバーン・ポットに入り過ぎてしまうので、点火のときに過剰な煙が発生する恐れがあります。

3. 燃焼排気ファンの速度調整は、窓や灰ドアが開いていると、オーガモーターや自動点火装置を稼働させません。

4. 燃料供給の速度を調整します。初めて焚くとき、あるいは別のペレット燃料を焚くときは、図 5 にあるように燃料供給調整ダイヤルを #4 に設定してください。#4 は標準的な設定で、さらに大きくする必要があるかもしれません。最適な燃料供給率になるように微調整していきます。ペレット供給率が高すぎると、燃料が無駄に消費されることになります。

5. 週に 1 度行うメンテナンスの手順です。燃焼ポットの底に新しい燃料が少し残ったままでも、付属のスクレイパーで掃除して問題ありません。まず、燃焼ポットの前部からこそぎとった灰を灰受皿に落とします。次いで、燃焼ポットの上部表面から下向けにこそぎ取り、燃焼ポットの底へ落とします。これは、ストーブが点火すると、供給装置によって押し出されて燃えつきます。

6. 灰受皿は、ペレット燃料約 1 トンから出た灰を溜めることができます。灰は年に 1 ～ 2 度捨てればよいことになります。（ペレットの品質により変動があります）

手動点火「冷却時」起動 / 自動点火装置 OFF

ストーブが電源につながっていることを確認してください。

重要：不要な煙を出さないため、点火前に灰受皿に燃料がはいってないことを確認してください。

運転中はすべてのドアが閉まっていなければなりません。シールやガスケットも良い密閉状態に保ちます。

1. 希望の供給率にするには、燃料供給調節器を回します。大方のペレットに関して、＃ 4 が良いでしょう。

2. 送風量・設定切替をまず切 に回し、それから望みのモードのところに回します。これによりコントロールがリセットされ、燃焼排気ファンが動き始めます。

3. 温度ダイヤルを希望の設定まで回します。

4. 必要だと思ったら、スクレイパーで燃焼ポットを掃除してください。

5. テストモードを利用して燃焼ポットをペレットで満たします。過剰に入れず、前端の高さまでにしてください。

注：自動点火を試みた場合は、次の手順を実行する前に少なくとも 30 分間の冷却時間を確保してください。

6. ペレットの上に着火剤ジェルを載せて、ペレットとかき混ぜると、点火が速やかにおこなわれます。下記の「注意」の囲み内を読んでください。市販の着火剤ジェルの使用は、ストーブが冷えた状態で点火するときのみです。燃焼ブロワーが確実に運転されるよう、ジェルを加える前に、以上の手順を必ず行ってください。適切な利用には、着火剤メーカーの指示に従ってください。

7. マッチで着火ジェルに火をつけ、ドアを閉めます。火が一定の温度に達すると運転が始まります。

8. 運転中も必要に応じてホッパーにペレットを補給し、灰を捨てます。

注　意

化学薬品、液体着火剤は使わないでください。絶対に、ガソリン、灯油などの液体燃料を、ペレットストーブの着火や火を強めたいときに使わないでください。また、引火性のあるものは、運転中のストーブからは離して保管してください。

警　告

承認された燃料だけを使い、ストーブでゴミは燃さないでください。

注：運転前に、梱包や出荷関連のものは取り除いておいてください。

室内センサーの取り付け

室内センサーの取り付け

室内センサーは、150cm のワイヤーの先端に小さな温度センサーが付いたものです。普通の壁用サーモスタットのように取り付けることができます。ストーブ背部にセンサー用の接続端子があります。付属のセンサーを、希望する高さまで伸ばし、温度を感知したい場所に取り付けます。

注：別の部屋やストーブから 7.6m 以上離れたところへの取り付けはお勧めしません。室内センサーの取り付けは、アセントラストーブの優れた効率を引き出すには欠かせません。
注：ストーブの背部に取り付けるだけでもいいので、室内センサーは必ず取り付けてください。

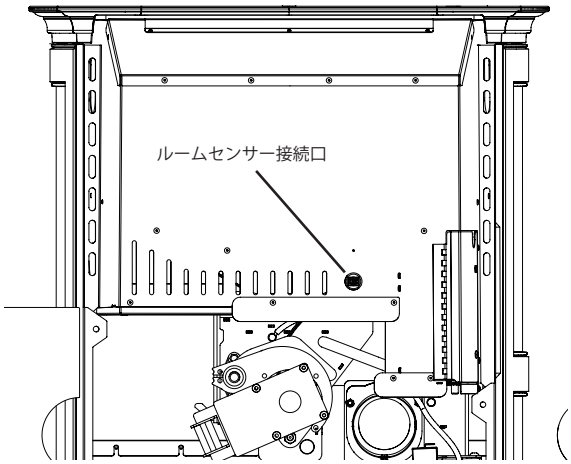


図 9

リアシールド

リアシールドは熱を遮断させる働きがあります。ストーブの使用中は、取り付けてご使用ください。取り外しは 4 カ所のネジを外し、中央部から 2 つに分かれるようになっています。

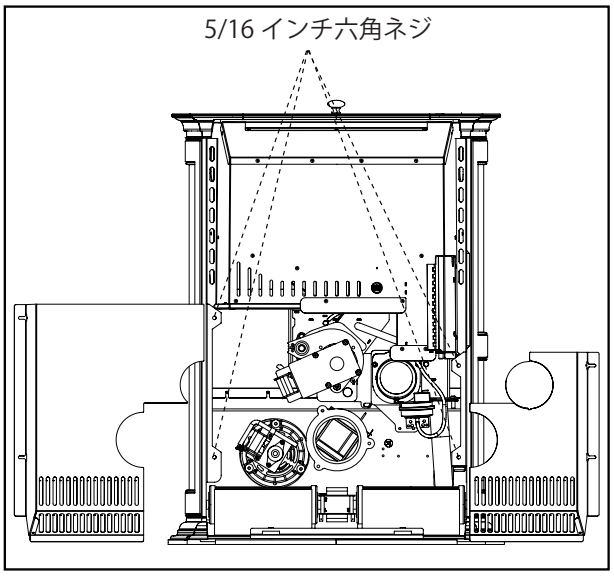


図 10

メンテナンス

毎回の着火時

・燃焼ポットの清掃

・ガラスの清掃

月に 1 回もしくは必要に応じて

・ホッパーとスライドプレート部の木粉の清掃

・熱交換部の清掃

・灰受皿の灰の除去

シーズンオフ

・煙突掃除

・煙突、燃焼ポット、ガラス、燃焼ブロワーの清掃

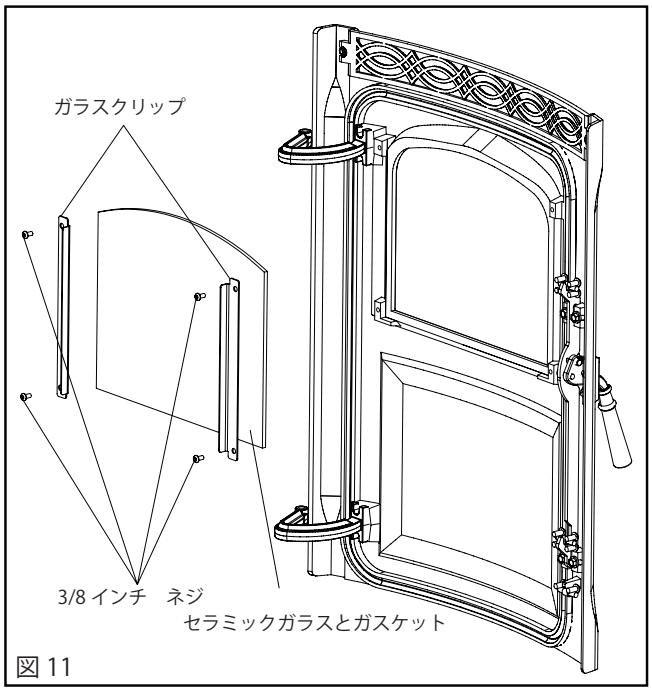


図 11

アセントラのガラスは、高温に耐えられるように、厳しい基準をクリアして製造されています。ご使用には注意深く取り扱ってください。ドアを強く閉めたり、ガラスに堅い物をぶつけたりしないでください。ガラスが割れたりヒビが入ったときは、ガラスを交換するまで、ストーブは焚かないでください。

ガラスの交換

割れたガラスとガスケットを慎重に取り外します。交換するガラスは、専用のガラスを使用し、それ以外のガラスは使用しないでください。

割れたガラスを注意深く取り除いたら、ネジとガラスクリップを取り外します。新しいガラスの周囲に 1/4 インチの粘着ガスケットを取り付けます。ガラスとガスケットをドアに置きます。ガラスクリップをとりつけて、ネジを締めて留めます。

ガラスの清掃

ガラスの表面にたまった灰は、状況に応じ掃除しなければなりません。長期間そのままの状態にしておくと、灰に含まれる酸の影響で、ガラスが腐食する恐れがあります。ガラスの掃除は、ガラスが冷えた状態で行ってください。ストーブガラス専用のクリーナーを使用してください。清掃後は完全に乾燥させてください。

煤 (スス) と除去

煙突火災の危険を減らすため、煤は取り除かなければなりません。ストーブシーズン中は、煙突を定期的に点検します。煙突内に 3mm 以上の厚みの煤があった場合、煙突火災の危険をなくすため、取り除きます。

煙道火災が起きたら

万が一、煙道火災が起きた場合、送風量・設定切替ダイヤルを切の位置にして、ストーブの運転を停止させます。ストーブの電源は抜いてはいけません。ストーブのドアやホッパーのふたも開けてはいけません。

その後、必ず販売店に連絡してください。

灰の除去

灰受皿は高温になっている場合があります。取り出すときは、ストーブを消火して冷えていることを確認してから取り出します。フロントドアを開き、灰受皿を引き出したら、ハンドルをあげて運びます。灰を捨てるときは、別売りの灰入れバケツにいれて保管しなければなりません。灰を入れたら、容器はすぐに屋外に出し、地面か非可燃材で覆った床に置きます。可燃性の物があれば、十分に離して置いてください。その後、お住まいの条例に従い、灰を処分してください。

メンテナンス

燃料供給室

供給機（フィーダー）の機械的な動きにより、このチェンバーには粉末が溜まりやすくなります。年に一度は点検して、掃除をしましょう。

供給機のカバーを外すには：

●２個の 5/16 インチの蝶ナットを取り外します。

●カバーをスライドさせて、ネジ付きスタッドから外します。

●必要に応じて、チェンバーの内側を点検・掃除します。（図 12）

●掃除が終わったら、カバーを戻しますが、このとき、必ず供給機本体の中央に位置させ、蝶ナットを手で固く締めてください。

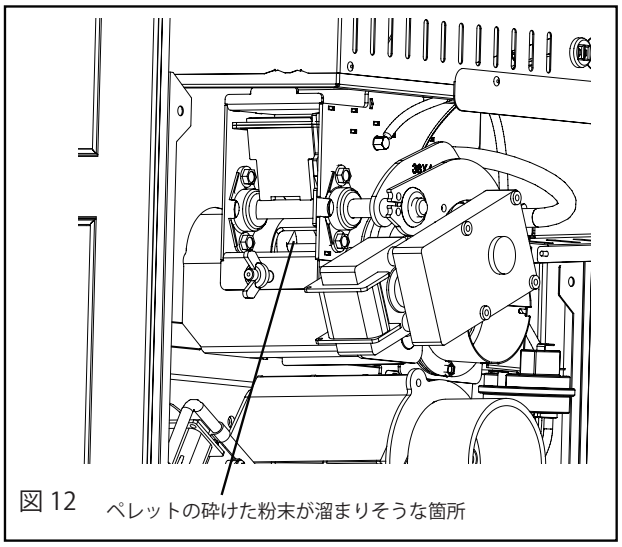


図 12　ペレットの砕けた粉末が溜まりそうな箇所

火室内の清掃は毎月もしくはペレットを 1 トン焚く毎に行ってください。

1. 二枚の熱交換器カバーを取り外します。（図 13）このカバーは鋳物製で、右上と左コーナーでスイング・ラッチで取り付けられています（図 14）。右側のカバーは、熱交換器カバー上端が外れるまで、ラッチを上に持ちあげます。カバーを手前に約 5cm 傾けて持ち上げると、下端が外れ、上部ドア開口部から取り出せます。もう片側の熱交換器カバーについても同じようにして外します。

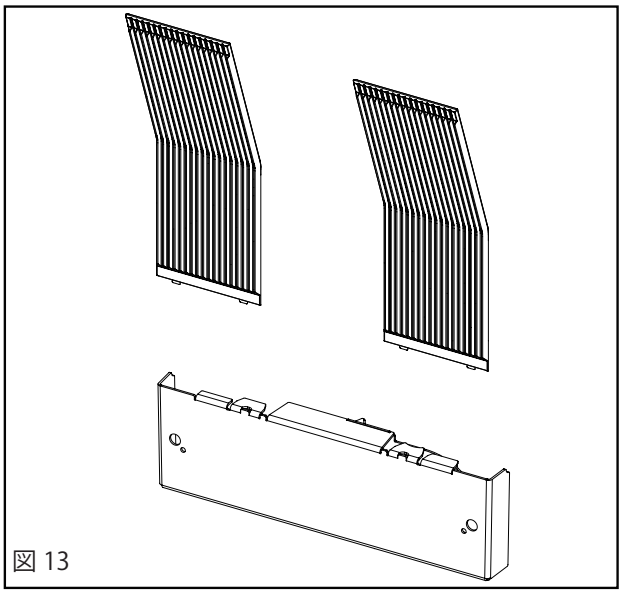


図 13

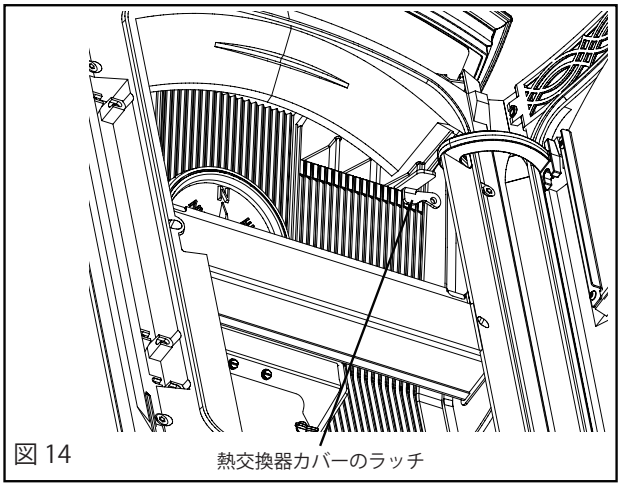


図 14　熱交換器カバーのラッチ

メンテナンス

2. 燃焼用空気の取り込みアセンブリーを取り外します（図 13）。このアセンブリーは 2 個のスイングラッチで留めてあります（図 14）。ラッチを回してロックを外します。まず右側を外側に傾けると、アセンブリーは下方のドア開口部から取り出せます。

3. これでストーブの内部を掃除する準備ができました。付属品のスクレイパーを使用し、熱交換器の表面をこすって掃除してください。この掃除には、ワイヤーブラシなどを使用しても落とすことができます。燃焼用空気の送風ファンのブレードとファン・ハウジングも掃除します。清掃中にファンのブレードを曲げないように注意してください。ブレードが曲がると、ファンブレードのバランスを崩してしまいます。（図 16）

4. 排気管の中の煤を掃除機で吸い取ります。排気管を掃除するときは、EPS プローブを曲げないように注意してください。ESP プローブは、管の約 20cm 奥側ににあり、排気管をのぞき込むと確認できます。

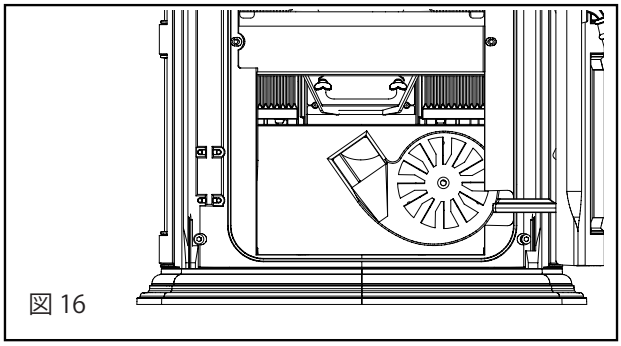
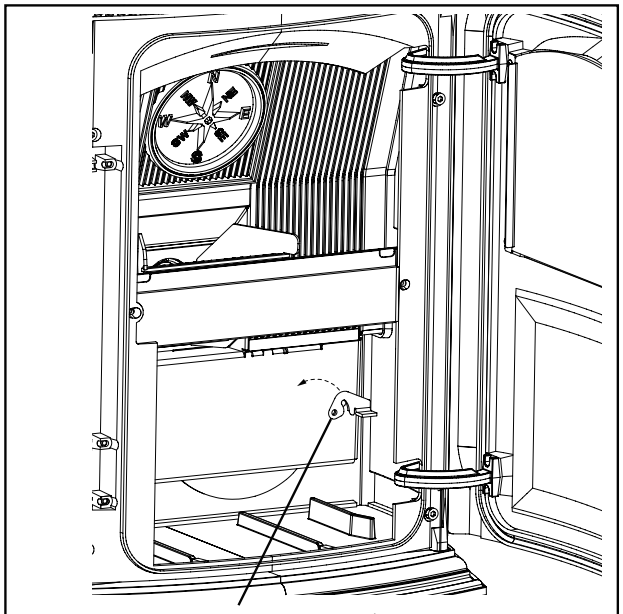


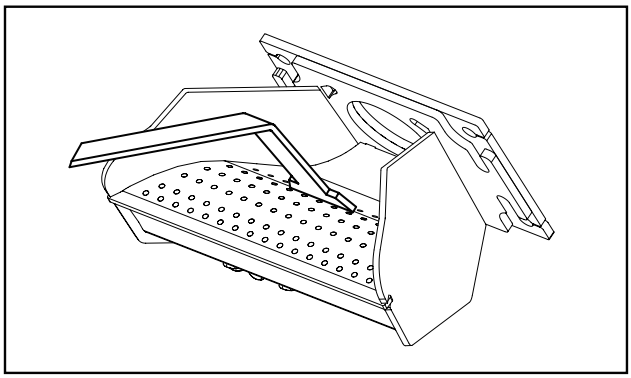
図 16

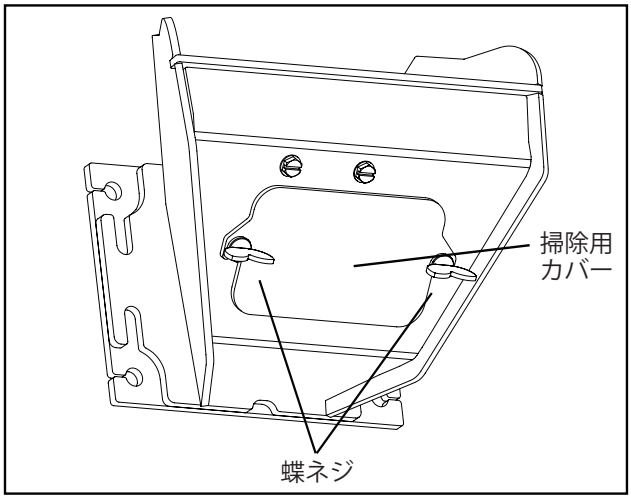


燃焼用空気取り込みアセンブリーのラッチ

図 15

燃焼ポットのメンテナンス





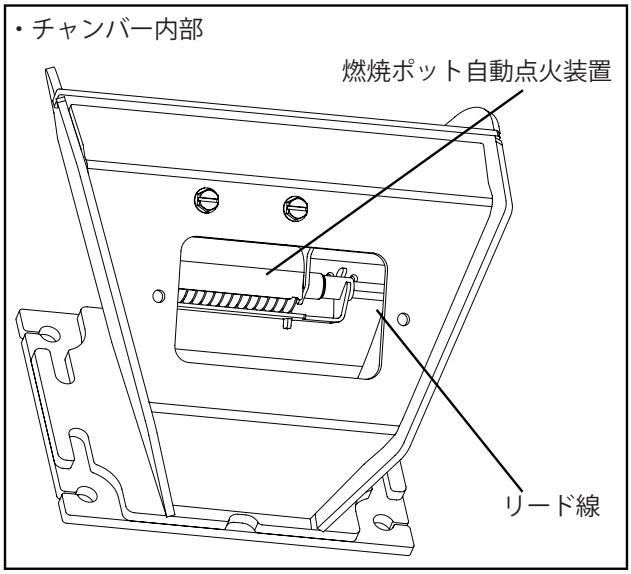


図 17　灰受皿開口部から見た図

燃焼ポットの掃除とメンテナンス

1. 燃焼ポットの穴の開いた表面と両側面をスクレイパーで削ぎ落とします。燃焼ポットから完全にすべてを取り除く必要はありません。多少残っても、次回使用中に押し出されます。

2. ストーブが消火し、燃焼ポッドが冷えたとき、付属の六角棒スパナで、燃焼ポット・グレートに付着した蓄積物を取り除いてください。穴にスパナを押し込み、通るようにします。この作業を行うときは、点火装置に損傷を与えないように気をつけます。

危　険

カバーを外すときは、予め電源を抜いておいてください。

3. 燃焼ポット下方手前にある 2 個の蝶ネジつまみを緩めます。

4. 掃除用カバーを持ち上げ、下のチェンバー（掃除室）を開けます。

5. チェンバー内部にたまった灰を掃除します。この間、カバーは外しておきます。スクレイパーを使って、燃焼ポットの上部手前の縁を軽くたたくと、灰が細かく、緩くなって、穴に落ちます。点火部分の灰も落とします。

自動点火装置は、点検･修理などのサービスに備えて、絶縁オス／メス電線コネクターによって取り外し可能になっています。リード線（燃焼ポットの内側と制御盤からのワイヤー）の接続部は、常に供給機本体の後部に引き込まれています。

非常に重要なことは、コネクターは供給機内側の後部に引くという点です。また、点火ワイヤーループの余分線は、供給機の後方から出して結束し、いかなる可動部品による損傷も受けないようにします。

注：運転に先立って、リード線のコネクターが常に、供給機本体の後方まで引かれていることを確認してください。

警　告

燃焼ポットの清掃室を掃除するときは、高温の自動点火装置ワイヤーを傷つけないように、注意深く行ってください。

クレオソートの生成と清掃チェンバーを掃除する必要

薪が燃えるとクレオソートが生成される可能性があります。ストーブを焚くシーズン中は、クレオソートの付着ができていないかどうか、定期的に通気経路をチェックしてください。3mm 以上の厚いクレオソートの層ができていたら、煙突や通気経路に火災が起こらないようにするため、取り除かなければなりません。

アセントラ　モーターと構成部品の位置

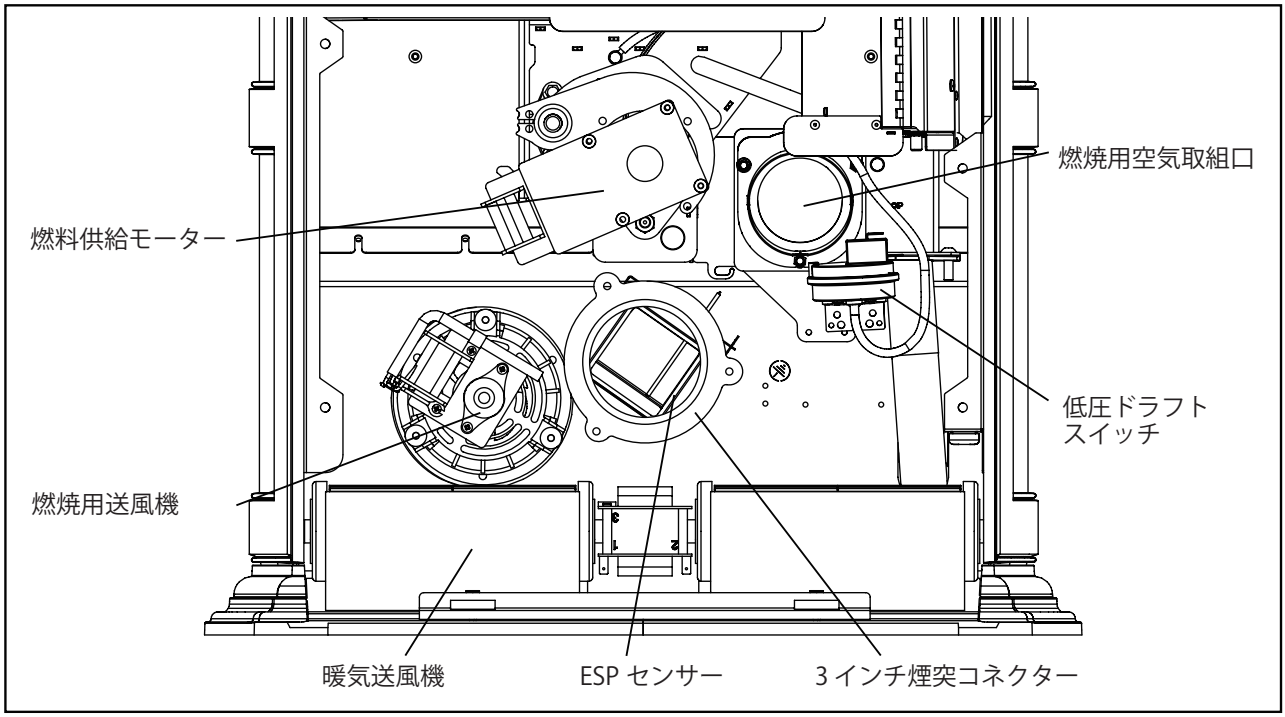


図 18

ハース＆ホーム テクノロジーズ社 HARMAN 日本総代理店
ダッチウエストジャパン株式会社

帯広本社　〒 080-0010　北海道帯広市大通南 28 丁目 4
TEL 0155-24-6085　FAX 0155-26-0506

0120-700-027
info@dutchwest.co.jp